

令和7年度 鹿屋中央高等学校入学試験問題

国語

注意

- 1 監督者の「始め」の合図があるまで開いてはいけません。
- 2 問題用紙は表紙を入れて十一ページです。これとは別に解答用紙が一枚あります。
- 3 受験番号は、解答用紙及び問題用紙の決められた欄に記入しなさい。
- 4 答えは、問題の指示に従って、**すべて解答用紙に記入しなさい。**
- 5 監督者の「やめ」の合図ですぐにやめなさい。

受験 番号	
----------	--

1

次の1・2の問いに答えなさい。  
1 次の——線部のカタカナは漢字に直し、漢字は仮名に直して書きなさい。

- (1) 作品を見る目をコヤす。 (2) 自分のシヨクセキを果たす。  
(3) ジュンジヨ立てて話す。 (4) 真摯な態度で臨む。  
(5) 幻影に惑わされる。 (6) テーブルを隔てる。

2 次の行書で書かれた漢字を楷書で書いたときの総画数を漢数字で答えなさい。

# 錦

2

次の文章を読んで、あとの1〜5の問いに答えなさい。

私たちが「読書」とか「本を読む」というとき考えているのは、一冊のきちんとしたテキストをはじめから終わりまで読み通すこと、それも、もし外国語で書かれたものなら、できれば原語で読み通すことである。これは情報を得るためにやるわけではない。もし、たとえばカントの『純粹理性批判』について、そこにどんなことが書かれているか情報を得たいということだったら、八百ページ近い分厚いテキストを読むよりも、**a**書かれた哲学史なり解説書なりを読む方がずっと手っ取り早いし、よく分かるだろう。しかし、カントの哲学を勉強しようというときには、それでは間に合わない。テキストを読むということは、そのテキストについての情報を手に入れるということとは違うことなのだ。文学のばあいだって同じことだろう。ドストエフスキーの『悪霊』<sup>(註)</sup>を読むことは、文学史なりダイジェスト版なりで『悪霊』の粗筋や登場人物についての情報を手に入れることとはまるで違うことなのだ。

そして、私たち文系の者——というのも大ざっぱな分類の仕方だが、ま、いいでしょう——にとって主要な仕事はテキストを読むことであって、それについての情報を得たり、それについて論文を書いたりするのは、あくまで**b**な作業なのである。

要するに、本には二通りの読み方があるということである。一つは情報を得るための読書であり、これはコンピュータで間に合う、というよりコンピュータの方がはるかに能率的に処理してくれる。だが、本は情報を得るために読むものではない。そして、このもう一つの読書はコンピュータでは代用できそうもないように思われる。私はここで、一言ではうまく定義できないこのもう一つの本の読み方について書いてみようと思う。

といっても、これは別に特別な読み方ではない。つい最近までは誰もが本はそんなふう読んでいた。ところが、パソコンが身近になってから、急に情報の獲得だとか処理だとかだけに眼がいき、「必要な情報だけ残して、いらぬ情報はどんどん消す」ような読み方だけが本の読み方だと思われるようになってしまったのである。

哲学の勉強をしている者たちでさえ近頃は、インターネットで自分の研究に必要な文献のリストを呼び出し、さらにそのなかの目ぼしい文献を呼び出して必要な情報を集め、それを組み合わせて論文を書くということをやっている気配がある。先ほどの論文で中山さんが、その面白い例を挙げておられたので借用する。

アメリカの大学院生で、ケルケゴールで学位論文を書いている男がいた。ケルケゴール関係書を積み上げて、索引から引用文を片っ端からカードに取り、それを並べて書く。ハイパーで読み、リニアに書くというやり方をしていた。テーマがテーマだけに、果たしてそれでよいのかな、と誰しも首を傾げたくなる。ケルケゴールの読者なら、それがビジネスライクな学術書のスタイルには向かないと思うからである。

「ハイパーで読み、リニアに書く」ということの意味は、中山さんの論文の前後を読むと分かるのだが、それはいいことにしよう。ある程度の見当はつく。この大学院生はまだカード処理の段階だったようだが、いまならコンピュータではるかに能率的に処理できるだろう。日本でも、これに近い論文の書き方をしている連中はいくらでもいると思う。だが、中山さんの言い方は少し正確さに欠ける。問題は、キルケゴールがこうした論文の書き方に合うか合わないか、たとえばデカルトなら合うがキルケゴールは合わない、というところにあるのではない。哲学の勉強をすることを、こんなふうにして哲学の論文を書くことだと思っていると問題なのだ。

哲学の勉強をするということは、哲学的なものごとを考える考え方を身につけるといふことであろうが、これは情報を集めたからといってできることではない。では、どうすればいいのか。私の経験したかぎり、特別の天才でないかぎり——そんな天才には、幸か不幸か私は出会わなかったが——、しっかり考えぬいて書かれた哲学のテキストをはじめから終わりまできちんと読み、その著者の思考をいわば追思考するという以外に道はないと思う。

日本で西洋哲学を勉強するというのはかなり特殊な事態であって、ほかの学問を勉強するのに比べてはるかにややこしい事情があるから、話が極端になるかもしれないが、極端なだけに先に言ったもう一つの本の読み方というのをはつきりさせるのに役立つようにも思われる。このもう一つの読み方というのは、こんなふうには、それによってものの考え方を身につけるような読み方のことである。文学書のばあいだったら、それによってものの感じ方を身につけるような読み方ということにでもなるか。ものを考えるとか感じるとかいうことは、放っておいてもひとりでできるようなことになることではない。はつきり訓練が必要である。その訓練が読書なのだ。喜びでも悲しみでも、深くこまやかに感じること

ができるようになるには、小説でも詩でもいいが、深く感じる能力をもった人の書いたものを読んで、その感じ方を追体験し、学ばなければならぬ。こういう読み方をするときには、重要なところだけ拾い読みするとか、あとは跳ばし読みするとか、「いらぬところはどんどん消してしまふ」などというわけにはいかない。どうも近頃、こうした本の読み方やその効用が忘れられすぎているのではなからうか。

(木田元『哲学の余白』による)

(注) テキストⅡここでは文章のこと。

カントⅡドイツの哲学者(一七二四～一八〇四年)。

ドストエフスキⅡロシアの作家(一八二一～一八八一年)。

ケルケゴールⅡデンマークの哲学者(一八一三～一八五五年)。キルケゴールも同じ。

デカルトⅡフランスの哲学者(一五九六～一六五〇年)。

1 本文中の **a**・**b** にあてはまる語の組み合わせとして、最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア (a 詳細に b 付随的) イ (a 見栄えよく b 補足的)  
ウ (a 後世に b 義務的) エ (a 手際よく b 副次的)

2 — 線部①「登場」とありますが、これと熟語の構成が同じものから選び、記号で答えなさい。

- ア 採用 イ 精読 ウ 募金 エ 日没

3 次は、ある生徒が授業で本文を学習し、— 線部②についてまとめた【フートの一部】です。

- Ⅰ は六字、Ⅱ は三字で本文中から抜き出して書きなさい。

【フートの一部】

○本の二通りの読み方

一言ではうまく定義できない読書

- ・ **Ⅰ** に処理させることはできない。
- ・ つい最近まで誰もがやっていた。

情報を得るための読書

- ・ 必要な情報以外は消すという **Ⅱ** な読み方。

4 次は、授業で、ある生徒が本文の学習内容をまとめて発表した際の【スライドの一部】と【発表原稿】です。【スライドの一部】と本文の内容を踏まえて、【発表原稿】の  に入る内容を六十字以内で考えて書き、原稿を完成させなさい。

【スライドの一部】

ケルケゴールで学位論文を書くアメリカの大学院生(=「哲学の勉強」ではない具体例)



では、「哲学の勉強」とは？

【発表原稿】

この文章では、筆者の主張を伝えるために効果的な具体例が挙げられています。筆者の考える「哲学の勉強」とは、アメリカの大学院生の例のように、 を身につけることです。

5 次は、本文の内容についての【先生の問いかけ】と、それに対する複数の生徒の応答です。本文の内容を正しく読み取っていないものを、あとのア〜エから一つ選び、記号で答えなさい。

【先生の問いかけ】

筆者は、本の読み方やその効用が忘れられているということ、残念に思っているようですね。

- ア 本の読み方としては、本を書いた人の感じ方を学びながら読むことが大切で、それには訓練が必要だとはつきり述べていますね。
- イ 訓練といっても、重要な箇所を拾い読みや飛ばし読みをする訓練とは違うようですが、それは特殊な読み方というわけではないですね。
- ウ 訓練をひとりで行えるようになるためには、深く感じる能力をもった人の書いたものを読むことが何よりも大切なのですね。
- エ 感受性の豊かな人が書いた小説や詩を読み通し追体験し学ぶことで、喜びや悲しみをこまやかに感じられるようになるのですね。

次の文章を読んで、あとの1～4の問いに答えなさい。

堀川院の御時、勘解由次官明宗とて、いみじき笛吹きありけり。(注)ほりかはあん (ゆゆ)

しき心おくれの人なり。院、笛聞こしめされおとて、召したりける時、(注)に気後れする

帝の御前と思ふに、臆して、わななきて、え吹かざりけり。(注)みかど (体が震えて)

本意なしとて、相知れりける女房に仰せられて、「私に坪の辺りに呼(注)わたくし(注)個人的に

びて、吹かせよ。我立ち聞かむ」と仰せありければ、月の夜、かたらひ(大変)

契りて、吹かせけり。「女房の聞く」と思ふに、はばかりかたなくて思(注)ちぎ (気後れすることなく)

ふさまに吹きける。世にたくひなく、めでたかりけり。

帝、感に堪へさせ給はず、「日ごろ、上手とは聞こしめしつれども、(感動なさって)

かくほどまでは思しめさず。いとどこそめでたけれ」と仰せ出されたる(注)おぼ

に、「さは、帝の聞こしめしけるよ」と、たちまちに臆して、さわぎけ(さては)

るほどに、縁より落ちにけり。「安楽塩」といふ異名を付きにけり。(あだ名が付いてしまった)

『十訓抄』による

(注) 堀川院の御時 第七十三代堀川天皇の時代、一〇八七～一一〇七年。

えぐざりけり 〴〵することができない。

女房 朝廷に仕える宮中の女性。

坪 建物などに囲まれた狭い庭。

安楽塩 楽曲の名。ここでは「ああ落縁」と重ねている。

1 線部①「かたらひ」を現代仮名遣いに直して書きなさい。

2 線部②「吹かせけり」の主語として正しいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 明宗    イ 帝    ウ 女房    エ 笛

3 線部③の意味として、最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア こんなにまで気後れをする人だとは知らなかった。  
イ これほどまでに笛がうまいとは思わなかった。  
ウ どのように笛を吹くのかまでは想像できなかった。  
エ まさか自分の前でも笛を吹いてくれるとは思わなかった。

4 次は、本文を読んで先生と生徒が話し合っている場面です。Ⅰ

Ⅲ には適当な言葉を補い、会話を完成させなさい。ただし、  
Ⅰ には十五字以内でふさわしい内容を考えて書き、Ⅱ には  
本文中から六字の言葉を抜き出して書き、Ⅲ にはあとの語群か  
ら最も適当なものを選び、記号で答えることとします。

先生 「明宗という笛の名手の話ですね。読んでみて分からなかつたところを、メモにして提出してください。」

生徒 A・B 「はい。」

【疑問点のメモ】

A 第二段落で、明宗が笛を吹けたのはなぜか？

B 最後の場面の明宗は、周囲からどう思われていたのか？

先生 「まずAさんの疑問です。第一段落で明宗は、帝の前では緊

張のあまり I のですね。そこで帝は女房に命じ、ある作戦を実行しました。その結果、明宗は帝が聞いているとは思わず、気楽に笛を吹けたのですね。」

生徒A 「なるほど。帝自身は II と言っていることからわかるように、明宗の前には姿を見せていなかったのですね。」

先生 「そうですね。次にBさんの疑問です。明宗は変わったあだ名を付けられてしまいました。周囲からどんなふうに見られたのか、心配になりますよね。実はこれと同じ場面が別の話にもあります。【資料】を読んでみてください。」

【資料】

縁よりさかさまに落ちにけり。御門笑はせおはしまして……

(『教訓抄』四による)

生徒B 「なるほど、これを読むと明宗が縁から落ちたことは III できごととしてとらえられていると考えられますね。」

語群

ア 気の毒な                   イ 教訓じみた  
ウ あきれた                   エ なごやかな

4

次の文章を読んで、あとの1〜5の問いに答えなさい。

演劇に打ち込んできた星子だが、たった一人の家族である兄(康晃)と、故郷である(北海道)陸別町への思いから、演劇ができる遠方の高校の受験を断念した。中学校の校長からも、演劇ができる高校を受験してほしいという兄の気持ちを伝えられ説得されたが、星子の意志は変わらなかった。その日の帰り道、友達(和美と春菜)から「映画のロケやってるよ!」と声をかけられた。

見せ場の撮影なのか、スタッフが固唾を呑んで見守る中、テレビで馴染んだ人気の俳優が相手役の頬を張る。手加減なしの、派手な音が出た。

「一緒に行こう、って言ったじゃない。何処までも一緒に行こうって」哀しい表情で俳優に絡むのは、星子と四つしか違わない若い女優だった。

「ぼくたち一緒に行こう。みんなの本当の幸を探しに、何処までも何処までも一緒に行こう——」

星子の耳もとに、星子自身の声が帰ってくる。映画のロケの現場のはずが、暗転して、真っ暗な舞台上に立つ星子を、ピンスポットが眩しく照らしていた。

封印したのに。

封印したはずなのに。

星子は自分の台詞を追い払おうと、両の手で耳を塞いだ。

「あ、星子」

両耳を押さえたまま人垣から離れた星子に、和美と春菜は狼狽える。星子、星子、と周囲を憚って呼ぶ友の声を振り切り、星子はその場を逃げ出した。

何処をどう歩いたのか、あまり記憶がない。気付けば大通りから本

證寺しょうじに続く長い階段の中ほどに座っていた。陽は落ちて、気温はぐっと下がり、いくらしっかり着込んでいるとはいえ、冷気は足もとから這い上がってくる。

目を転じれば、まだひとが残っているのか、町役場の明かりが洩れている。カナダの姉妹都市にちなみ「ラコム通り」と名付けられた道をオレンジ色の街路灯が照らす。役場の背後には、黒々とした山のシルエツトが迫る。高い位置から見渡す陸別の夜は、静寂で厳かだった。

さすがに歯の根が合わなくなって、星子はゆっくりと立ち上がり、階段を下りる。大通りを、こちらへ向かってくる一台のワゴン車があった。運転手が星子を認めたのか、車は緩やかに徐行して路肩に止まった。

「星子ちゃんじゃないか」

窓が開いて、声をかけてきたのは、天文台の青柳あおやぎだった。

「どうしたんだい、こんなところで」

優しく話しかけたものの、青年は階段の少女が今にも泣き出しそうなのに気付いた様子だった。仄かな笑顔は消えて、案ずる表情になる。

「乗って」

手を伸ばして助手席のドアを開け、青柳は星子に言った。

銀河の森天文台、という美しい名前を与えられた天文台のドーム内には、百五センチの口径を持つ反射望遠鏡が据えられている。公開されている天体望遠鏡の中で日本最大級、と聞いたことがあった。

月曜日の今日は休館日のため、ほかにひとの姿はない。星子は望遠鏡の台座に浅く腰かけて、青柳に今日の校長室での遣り取り、そしてロケ現場での出来事をぽつりぽつりと語った。星子が語り終えるまで青柳は辛抱強く耳を傾けた。

「そうか、そんなことがあったんだ」

「あう声を受けて、星子は涙が零れそうになった。」

「皆が陸別を離れていく。私まで出て行ったらどうなるの、とか。演劇をやって大成できるワケない、とか。色々考えたら、頭の中がごちゃごちゃになって……」

初めて素直な気持ち打ち明けて、星子は溢れだした涙を手の甲で力任せに拭いた。少女の様子を見守っていた青柳だが、見学者用のダウンコートを二着手に取ると、一着を星子に差し出して促した。

「寒いけど、ドームの外に出てみようか」

ドームの扉を抜けて、そのまま天文台の屋上へと出る。足もとは凍りつき、油断するとつるつると滑るから、二人は手すりにしっかりと掴まって天を仰いだ。

頭上に輝く天の川。大犬が小犬を追い駆け、オリオンは果敢に牡牛に立ち向かう。霞んでいるあれはプレアデス星団。ペルセウスにカシオペアの姿も見つけられた。まだ月の姿はなく、漆黒の舞台に立つ星座たちの競演を遮る雲の幕もない。

「何て綺麗」

星子は手すりを持つ手に力を込め、背を逸らして天を仰いだ。

「この時期は一層、見ごたえがあるからね」

青柳は言って、同じように背中を逸らした。

暫くの間、互いの存在も忘れて、星々の姿に見入る。物言わぬはずが、無数の瞬きがこちらに語りかけてくるようだった。

「この星に魅せられて、僕は東京からここに移ってきたんだ」

青柳は星子に聞かせる風でもなく、ぽつりと呟いた。

東京から、と星子は繰り返す。

ああ、と青柳は視線を天空から傍らの少女へ移して、緩やかに口もとを綻ばせた。

「僕の実家はね、東京で半世紀以上続く和菓子屋なんだよ。一人息子

の僕は、けれど、どうしても星への思いを捨てられなかった。そして両親も、跡を継いでほしいという気持ちで封じて息子の思う道を選ばせてくれたんだ」

初めて知る話に、星子は思わず目を見張る。

「だからだろうね、僕には康晃君の気持ちだが、僕の両親のそれにならなくて仕方ないんだよ」

切なさの滲む口調で言って、青年は軽く首を振った。

星子は少し考え、やがて躊躇いがちに問いかけた。

「青柳さん、故郷の東京を出たこと、後悔してない？」

「してない」

一瞬の躊躇いもなく問いの答えを返したあと、それでは足りない、と思ったのか、青年は暫し考えて、こう言い添えた。

「これから年齢を重ねて、取り巻く状況が違って来ればまた別なのかも知れない。けれどそれでも、やっぱり後悔だけはするまい、と決めているんだ。僕の夢を知り、背中を押してくれたひとたちの思いを無駄にしないためにも、故郷を出たことを決して後悔しない」

天文技師の言葉は、少女の胸に沁み込んだ。

会話は途切れ、ふたりは再び夜空を仰ぐ。

オリオン座のベテルギウス、小犬座のプロキオン、大犬座のシリウス。巨大な冬の大三角形の間を、長く尾を引いて星が流れた。それを機に、青年はおもむろに唇を解いた。

「故郷って、人間にとつての心棒なんだと思うんだ。そのひとの精神を貫く、一本の棒なんだよ、きつと」

星子は青年の言わんとすることを理解しようと、真剣な眼差しをその横顔に注いでいる。それに気付いて、青柳は少女に柔らかな笑みを投げかけた。

「町を去るひとがあれば、戻るひともある。僕のように、新たにこの

町に来るひとだっている。それでも、故郷という心棒を持たないひとはいないし、心棒があるからこそ、ひとは羽ばたく勇氣を持てるんだと思う」

羽ばたく勇氣、と低い声で星子は繰り返した。

星子の身体に流れる、両親や前の世代から脈々と受け継がれてきた血。陸別で過ごした日々。陸別で育んだ夢。そうしたものが星子を形作り、これからも星子を支え続けるに違いない。そう、たとえ陸別を離れたとしても。

「ぼくたちは何処までだって行ける切符を持っているんだ——」

独り芝居の自身の台詞が、はっきりと耳に届く。

「羽ばたく勇氣……」

星子はもう一度、繰り返した。

(高田郁『ふるさと銀河線—軌道春秋—』による)

1 — 線部①のときの星子の心情として、最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 離れると決めたはずの演劇が、自分のこととして心によみがえってきて、どうしてよいかわからず混乱している。

イ 諦めたはずの演劇への情熱が再び燃え上がってきたことを、友達に打ち明ける訳にはいかないと困惑している。

ウ 自分がいくら演劇に打ち込んできたとはいえ、映画の女優の演技には到底及ばないことに打ちひしがれている。

エ ピンスポットに照らしだされて演技を始めそうになる自分を抑え、早くこの場から去りたいとあせっている。

2 — 線部②とありますが、次の文は、ここまでの青柳と星子のやり取りを説明したものです。

I は七字、II は十字で本文中から抜き出して書きなさい。

ワゴン車で通りかかり、星子の I 様子に気付いた青柳は、星子を天文台に連れてきた。そして自分が星への思いを捨てられずに II を初めて話した。後悔していかないと言う青柳の言葉に、星子は感銘を受けた。

3 — 線部③とありますが、これを言い換えた語句を本文中から五字で抜き出して書きなさい。

4 — 線部④とは、青柳の場合は具体的にどのようなことですか。次の文の  に入る内容を、「……に支えられて、」という形で、五十五字以内で書きなさい。

ことができるということ。

5 — 線部⑤を星子の気持ちや踏まえて朗読するとき、どのように読むのがよいですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 故郷への思いを持ち続けることで、陸別を離れても演劇の道で成り功できるはずだと確信する気持ちを踏まえ、力強い調子で読む。

イ 夢に向かって故郷を離れるという決断が自分には必要だという気持ちや踏まえ、自分自身に言い聞かせるようにゆっくり読む。

ウ 青柳の故郷のとらえ方の話を聞き今後の道筋が定まったという経緯を踏まえ、青柳への感謝の念を示すようゆっくりと読む。

エ 故郷を去るひと、戻るひとの存在に気付き、夢を実現できなくても挑戦してみたいという気持ちを踏まえ、明るい調子で読む。

5

川内さんのグループは、総合的な学習の時間の取り組みのなかで点字ブロックについて調べました。次は、**【新聞記事の切り抜き】**とその後の**【グループでの話し合いの様子】**、話し合いの際に参考にした**【資料1】**、**【資料2】**です。これらを読んで、あとの問題に答えなさい。

**【新聞記事の切り抜き】**

近年の取り組みとして、地下鉄の駅に二次元コードのついた点字ブロックを設置することが行われている。二次元コードをスマートフォンで読み取ると、アプリが音声で目的地まで案内してくれるというもの。

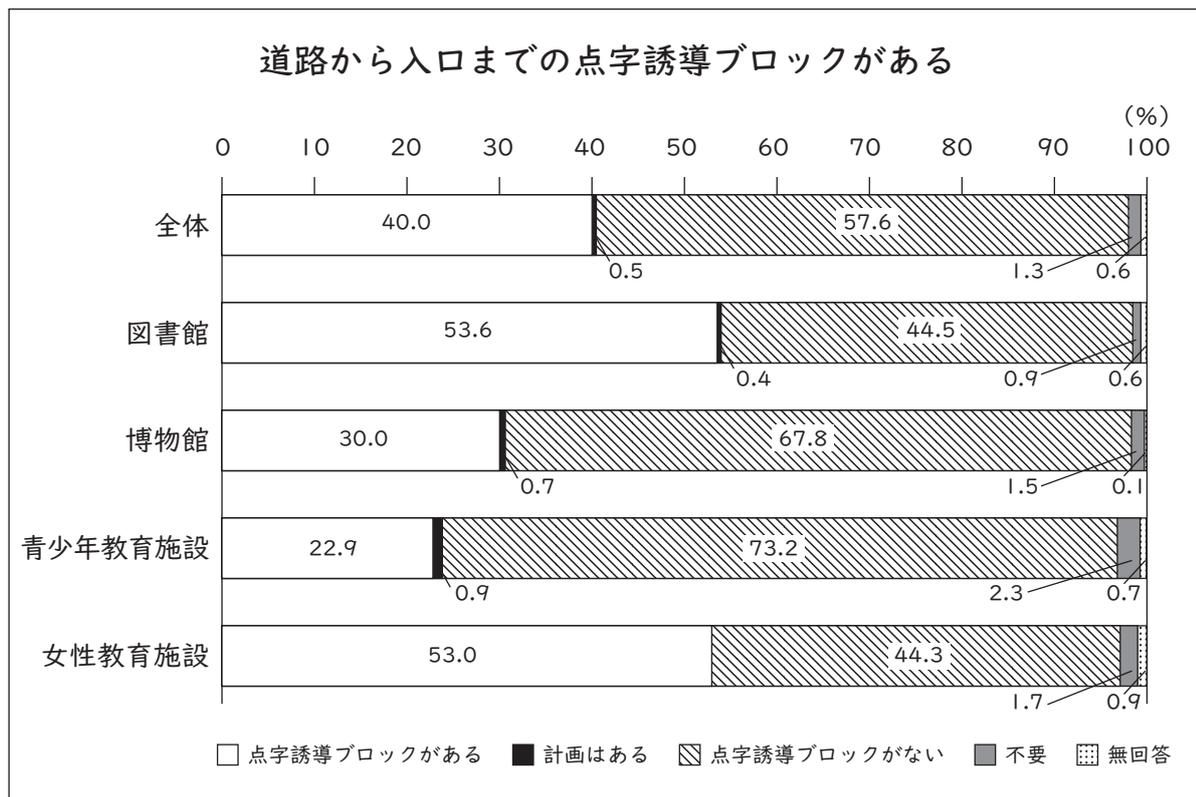
**【グループでの話し合いの様子】**

川内 「新聞記事にある取り組みが広がれば、目の不自由な人が駅をより利用しやすくなるはずだね。」

横田 「ただ、そのような最新の取り組みがある一方で、**【資料1】**のような現状もあるよ。施設の設定については、私たちの力は直接には及ばないけれど、知識や問題意識をもったり、社会に呼びかけたりすることが大切だね。」

青木 「そうだね。そのうえで、**【資料2】**を見ると、私たちにもできることがあると思えるよ。」

川内 「点字ブロックに関して、私たちにできることを考えてみよう。」



(文部科学省「令和元年度『生涯学習を通じた共生社会の実現に関する調査研究』社会教育施設において障害者が学習活動に参加する際に行う合理的配慮に関する調査報告書」をもとに作成)

- 道路や施設の入口からインターホンや案内所などの人のいる場所まで点字ブロックが続いていないことで困ったことはありますか。そのときに感じたことを教えてください。

#### 視覚障害のある方

- **点字ブロックは入口を探すための目印**

- ・弱視ですが、入口を探すために点字ブロックを目印にしています。点字ブロックの不備があると大変不安になります。

- **ここも視覚障害者は招かれていない。**

- ・入口がわからず入れなかったり、中も広くて音が反響しているようなところは受付も分からなかったりする。「ああ、ここも視覚障害者は招かれてはいるのだ」と感じた。

- 点字ブロックの上やその周辺に障害物が置かれていることで困ったことはありますか。そのときに感じたことを教えてください。

#### 視覚障害のある方

- **立て看板でつまずくおそれ**

- ・立て看板などが点字ブロックのすぐ脇に立っていると、つまずくことがあり、怖いです。

- **上だけでなく、周辺にある障害物も困る。**

- ・物が置いてあったり、人が上に乗っているときは本当に迷惑です。また、ブロックの上さえ空けておけばとすぐ横に物を置かれるのも迷惑です。

(総務省「博物館・美術館におけるユニバーサルデザイン推進サポートブック」(令和四年)をもとに作成)

## 問題

川内さんは、グループで話し合ったことを受けて、「点字ブロックの周辺で私たちにできること」というテーマで、意見文を書くことにしました。あなたならどのように書きますか。あとの(1)～(4)の条件に従って書きなさい。

## 条件

- (1) 二段落で構成し、六行以上八行以下で書くこと。
- (2) 第一段落には、【資料1】から読み取ったことを書くこと。
- (3) 第二段落には、【資料2】から読み取ったことと、点字ブロックの周辺で私たちにできることを書くこと。
- (4) 原稿用紙の使い方に従って、文字、仮名遣いも正確に書くこと。ただし、資料を示す場合や、資料中の数値をそのまま使用する場合は、次の例にならって書くこと。

例 【資料1】 ↓ 資料 1

例 数値 ↓ 五 三 ・ ○ %

